

レフ・トルストイ「3びきのくま」論  
—底本探究から見えてきたトルストイの特性を中心に—

A Study of “The Three Bears” by Lev Tolstoy  
—Focusing on Tolstoy’s Characteristics as Seen from Researching His  
Original Stories—

丸尾 美保  
MARUO Miho

要旨

レフ・トルストイ再話「3びきのくま」は、『新アーズブカ』（1875年）に所収されたのが最初の出版である。トルストイが底本とした作品については現在まで確定されていない。英語圏における「3びきのくま」の物語の変遷およびロシアでの受容史を踏まえて底本の推定を試みた。物語の構成や文章の細部から、トルストイは1860年代後半にラウトレッジ社で出版されたハリソン・ウィア絵『3びきのくま』（*The Three Bears*, illustrated by Harrison Weir. London: George Routledge & Sons）を参照しているのではないかと推定した。原話と比較したところ、トルストイの再話は、ストーリーが簡潔化されており、熊がロシア風の名前を持つのに対して女の子には名前がないこと、教訓がないなどの特徴を持っている。トルストイ再話による「3びきのくま」は、女の子の存在感は薄れたが、好奇心を持つ子どもの普遍性を肯定した物語となった。また、熊の存在に対する敬意と、実際の熊の生態がうかがわれる文章からは、きまじめなリアリストであった文学者トルストイの特徴が浮かび上がる。ロシアでは、「3びきのくま」は今日までトルストイ再話が権威をもっており、ロシア昔話であるとの認識のもとに大量に出版され続けている。

Abstract

Lev Tolstoy’s “The Three Bears” was first published in Tolstoy’s textbook *New Alphabet* in 1875. Until now, this story’s source has not been determined. Based on the evolving history of “The Three Bears” in English-speaking countries and the story’s acceptance in Russia, we located the source of Tolstoy’s story. From the composition and the text details, we inferred that Tolstoy referred to *The Three Bears*, illustrated by Harrison Weir and published by George Routledge & Sons in the late 1860s. Unlike the original story, Tolstoy’s story is characterized by its simplicity. In Tolstoy’s story, the bears were given Russian names, whereas the girl had no name. Furthermore, there were no lessons to be learned. Tolstoy’s “The Three Bears” adapted the story into one that piqued the curiosity of children. Further, the story, which expresses respect for the bears’ existence and their natural ecology, portrays Tolstoy as a serious realist. In Russia, Tolstoy’s “The Three Bears” has authority to this day, and it continues to be widely republished in the belief that it is a retelling of an old Russian tale.

Key Words

「3びきのくま」、ロシア児童文学、昔話の受容  
Goldilocks and The Three Bears, Russian children’s literature, the acceptance of foreign fairy tales

## 1. はじめに：トルストイ再話の「3びきのくま」について

ロシアの文豪で思想家のレフ・トルストイ（1828～1910）作として知られている「3びきのくま」（“Три медведя”）は、トルストイが作成した初等教科書『新アーズブカ』（*Новая азбука*）（1875）に最初に掲載された。1872年に出版された教科書『アーズブカ』（*Азбука*）（初等教科書・全4巻）は、挿絵の入った本であったが、高額であったこともあり売れ行きが悪く、また内容に対する批判的な意見もあった。そのため、1875年に新たに『新アーズブカ』と『ロシア語読本』3巻が出版された。新版は、前作の4分の1の値段だったこともあり、販売初期から好評で1917年の社会主義革命まで版を重ねた。ソビエト時代の国定教科書にもトルストイの教科書の作品が採用されていた。

『新アーズブカ』には『アーズブカ』にない新たな読み物が追加されており、その一つが「3びきのくま：おはなし」であった。ロシア語の「おはなし」（Сказка）は、日本語の「童話」や「おとぎばなし」「物語」のように、昔話から創作まで幅広い意味を包含する言葉である。

「3びきのくま」は、イギリスの昔話からトルストイが再話したものであったが、「おはなし」と記されていることから、ロシアではトルストイ作の物語あるいは昔話の再話として受け止められることとなった。現在ロシアでは「3びきのくま」といえば、このトルストイの再話が定番となっており、今日まで幼年向けの読み物や絵本として大量に出版され続けている。

トルストイ再話「3びきのくま」のあらすじは以下の通りである。

森に行った女の子が道に迷い、小さな家を見つけて、誰もいない家に入った。この家は3びきの熊の家で、父ぐまはミハイル・イワヌイチ、母ぐまはナスターシャ・ペトローヴナ、子ぐまはミシュートカという名前だった。熊たちは散歩に出かけていた。女の子は食堂で大きさの違う3つのお椀のスープを飲んでみて、小さな青いお椀のスープが気に入った。3つの椅子を試したあと、青いクッションのミシュートカの椅子に座って青いお椀のスープを飲み干し、椅子を揺らして壊した。寝室では3台のベッドを試し、ミシュートカのベッドで眠った。

家に帰って来た3びきの熊は、誰かがスープを食べたり、椅子を動かしたり、ベッドをしわくちやにしたりしているのを見て怒った。ミシュートカがベッドに寝ている女の子を見つけ、噛みつこうとしたが、女の子は窓から飛び出して走って逃げた。熊たちは追いつくことができなかった。

本論では、トルストイ「3びきのくま」の底本を英語圏の出版物を元に調査し、1860年代後半にラウトレッジ社で出版されたハリソン・ウィア絵『3びきのくま』（*The Three Bears, illustrated by Harrison Weir. London: George Routledge & Sons.*）を参照しているのではないかと推定した。原話特定の過程を明示したうえで、推定した原話との比較を基に、トルストイ再話の特徴を考察する。

## 2. トルストイ再話「3びきのくま」出版の背景

本章では1)で英語圏における「3びきのくま」の成立過程と先行研究について言及し、2)でロシアでの受容について考察する。

### 1) 英語圏での「3びきのくま」の成立過程と先行研究

「3びきのくま」の先行研究には、ウォレン・U.オーバー著『3びきのくまの話：国際的な古典の展開』（Warren U. Ober. *The Stories of the Three Bears: The Evolution of an International*

Classic. Delmar, New York: Scholar's Facsimiles & Reprints, 1981)がある。所収されている 15 のパターンの中にトルストイの再話も原文と英訳が収録されている。その解説でオーバーはそれまでの底本についての研究にも言及しており、推定されている原本について否定的見解を記している<sup>1)</sup>。

オーバーの研究も参考に「3びきのくま」の出版を、大英図書館、オックスフォード大学図書館、米国議会図書館、ネット公開されている古い絵本のカatalogなどから調査したところ、トルストイが出版した 1875 年までの英語圏の作品は全部で 49 件あった。そのうち内容を確認したのは、読み物 13 件（教科書 1 件を含む）と絵本 14 件<sup>2)</sup>である。まず、トルストイ再話が「3びきのくま」の変遷史のどの位置に相当するののかを確認するため、簡単にその歴史を振り返っておきたい。

### (1)確認された最も古い形

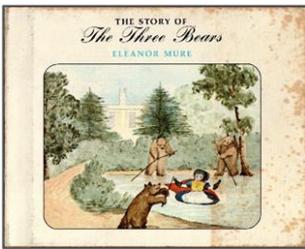


図1 ミュア作絵本  
(復刻版)の表紙

1831年にイギリスのエリナー・ミュア(Eleanor Mure)が作った手描きの絵本『3びきのくまの話』(*The Story of the Three Bears*)が最も古い形である(トロント公共図書館オズボーンコレクション所収)<sup>3)</sup>。(図1)

**内容:**昔、3匹の熊が人間たちの間に住むことにした。心の曲がったお婆さんが熊の留守中に家にこっそり入り込んだ。ミルクを飲み、3番目の熊の椅子の座面を壊し、ベッドの底板も壊した。熊たちが帰ってきて隠れているお婆さんを見つけ、罰としてお婆さんを暖炉で火あぶりにし、池に沈め、セントポール寺院の尖塔に放り上げた。

**絵:**3びきの熊たちは男性で、大きさに差はない。熊たちは服を着ていない。熊の家は、エリナーの父(ミュアが絵本をプレゼントした甥の祖父)の豪邸セシル・ロッジとして描かれている。

### (2)最初の出版と普及のきっかけ



図2『ドクター  
4巻の表紙』

活字になった最も古いものは、1837年にロバート・サウジー(Robert Southey 1774-1843)が『ドクター 第4巻』(*The Doctor & C. Vol. IV*)に所収した「3びきのくまの話」("The Story of the Three Bears")である。挿絵はなく、熊の身体と声の大きさに合わせて、文字の大きさと書体を変えている。長く「3びきのくま」はこのサウジー作が昔話化していったものであるとされていた。(図2)

**内容:**性格の良い3びきの熊たちがおかゆが冷めるまで散歩に出かけたすきに、粗暴で汚いお婆さんが忍び込んだ。お婆さんは熊たちの大きさに合わせたおかゆのポット、椅子、ベッドを調べて、どれも一番小さなものが気に入って、おかゆを食べ尽くし、椅子を壊し、2階のベッドで寝込んだ。熊たちが帰って来て、おかゆ、椅子、ベッドを見て、3回ずつ身体の大きさに合わせた声で怒る(文字も変えている)。おばあさんは窓から飛び降りて逃げるが、「首の骨を折ったか、森で行方知れずになったか、森から出て巡査に捕まって矯正院(監獄)に送られたか、わからない。熊たちは二度とおばあさんを見なかった」と悪い結末を予想して終わる。



図3 G.N.絵

同じ1837年にG.N.(ジョージ・ニコル)が、散文で書かれたサウジーの話を見聞向けの韻文にし、モノクロの挿絵を付けた小型本『3びきのくまの話』(*The Story of the Three Bears*)として出版した。この本は人気を得て何度も版を重ね、物語の普及のきっかけとなった。

**挿絵:**ボロボロの服を着たおばあさんと、野生的ではあるが人間のように暮らしている熊たちとの対比が面白い。靴と杖を残して窓から飛び降りるおばあさんの表現がユーモラスである。(図3)

### (3)おばあさんを女の子に変更

1850年J.カンドール(Joseph Cundall 1818-1895)は、『幼い子どもたちのための楽しい物語集』



図4 ハリソン・ウィア絵

(*A Treasury of Pleasure Books for Young Children*)に「3びきのくまのおはなし」(“The Story of the Three Bears”)を掲載した。本の前書きに、サウジーに敬意を表したうえで「シルバーヘア(Silver-Hair)として、より知られているし、おばあさんの話は他にもあるから」と説明して、熊の家の侵入者を老婆からシルバーヘアという女の子に変更した。ハリソン・ウィア(Harrison Weir 1824-1906)作のカラーの挿絵が入っていることもあり、物語のとらえ方に変化が生じた。(図4)

**内容：** ほぼサウジーと同じ文章だが、おばあさんの悪い性格（おかゆを食べて悪口を言う、椅子が壊れて悪口を言う、銀器を盗もうとする）や、おばあさんの汚い様子を少し修正している。大・中・小の熊たちは、サウジー同様に男性である。

**挿絵：** 女の子は赤いワンピース姿で、熊たちは少し衣装を着けている。無防備に眠る女の子を見ている男性の熊の挿絵から、なまめかしさを感じる。

#### (4)侵入した女の子の名前の変遷：名前が最初に登場した作品とその年代

##### ①シルバーヘア(Silver-hair) 銀髪ちゃん：1850年

上記カンドール『幼い子どもたちのための楽しい物語集』「3びきのくまの話」 [(3) 参照]

##### ②シルバーロックス(Silverlocks) 銀の巻毛ちゃん：1860年頃に登場

[パーシー・]クルックシャンク『3びきのくま』 ロンドン：リード社

([Percy] Cruikshank. *The Three Bears*. London: Read & Co., [1860].)

##### ③ゴールデンヘア(Golden Hair) 金髪ちゃん：1860年代末頃に登場

『フレンドリーおばさんのおとぎばなし』所収の「3びきのくま」 ロンドン：ウォーン社

(“The Three Bears” in *Aunt Friendly’s Nursery Book: containing thirty-six pages of pictures*. London: F. Warne, New York: Scribner, Welford and Armstrong, [ca. 1868].)

##### ④ゴールディロックス(Goldilocks) 金の巻毛ちゃん：1888年

『3びきのくま』R.アンドレ絵 ニューヨーク：マクローリン社

(*The Three Bears*, Illustrated by R. André. New York: McLoughlin Bro’s, 1888.) (Young Folks’ Series) (図5)

ゴールディロックスの名前の表記はこれまでは20世紀に入ってからとされていたが、1888年の絵本での使用を確認した。アメリカのマクローリン社では、1880年代末からこの名前が用いられた。



図5 アンドレ絵  
『3びきのくま』挿絵

#### (5)熊たちが家族になる過程

##### ①3びきとも男性

前出のエリナー・ミュア(1831)、ロバート・サウジー (1837)、ジョージ・ニコル (1837)、カンドール (1850) ((1)~(3)参照)

##### ②文章では独身だが、挿絵は父、母、子ぐま

1852年出版のフランセーズ・エリザベス・バロウ『小さな少年少女のためのアップルダンプリングとその他のお話』所収「3びきのくま」のモノクロ挿絵による。画家名は不明である。

(Frances Elizabeth Barrow. “The Three Bears” in *The Apple Dumpling, and Other Stories for Young Boys and Girls*. London: Addey & Co. )

その後、二人の兄妹熊と友だちの子熊のバージョンも見られた。

③父、母、小さな子ぐまの男の子

文章として最初の登場は、1858年ラウトレッジ社出版の『メイヴァおばさんの良い子のためのおとぎ話集』である。

(Aunt Mavor. *Aunt Mavor's Nursery Tales for Good Little People.*

London: George Routledge & Co.)

3びきは、パパくま(Pa-pa Bear)、ママくま(Mam-ma Bear)、子ぐま(the tiny Bear)と表記されている。アルフレッド・クロウキル (Alfred Crowquill) の挿絵がついている。(図6)



図6 1858 クロウキル絵

(6)女の子の性格と結末

①1850年カンドール『幼い子どもたちのための楽しい物語集』のシルバーヘア [(3)参照]

シルバーヘアは説明もなくやってきて、熊の家を荒らし、食べ散らかす。最後は森に走って逃げて、二度と会わなかったで終わる。(サウジーの悪い予言はなし)

②1858年『メイヴァおばさんの良い子のためのおとぎ話集』などのラウトレッジ社のシルバーロックス [(5)③参照]

シルバーロックスは、かわいいたずら好きな女の子で、森に遊びに行き、熊の家を見つけて入る。熊の留守宅では面白がって食べたり、自分が壊した椅子の回りを踊り回ったり、いたずらを教えてくれたマイクじいさんに話して一緒に笑おうと考えたりする。最後は、窓から跳びだして芝生に転がり、走って帰るが、家で叱られる。

③1860~70年代 ハリソン・ウェア絵『3びきのくま』(ラウトレッジ社)のシルバーロックス

(*The Three Bears*, illustrated by Harrison Weir. London: George Routledge & Sons.)

おてんばで、静かにしてられない女の子のシルバーロックスは、禁じられていたのに花のネックレスを作ろうと森に出かけた。概要は②『メイヴァおばさん』と同じである。結末は、無事に家に帰ったシルバーロックスはひどく叱られて、関係ないところには行かず、自分の物でないものをいじったりしないように気をつけるようになったとする。(図7)



図7 H.ウェア絵

④1873年 ウォルター・クレーン作『3びきのくま』のシルバーロックス

(Walter Crane. *The Three Bears*. London: George Routledge and Sons.)  
(Walter Crane's Toy Books New Series)

シルバーロックスは一人で森や小道をさまよるのが好きな女の子だった。ドアが開いていたので、知らずに熊の家の中に入った。裕福な服装をした熊たちは「皮を剥ごう」とか「食べてやろう」とか恐いことを言う。結末は、乳母がシルバーロックスに「熊たちから逃げおおせたのはラッキーだった」と語る。(図8)



図8 W.クレーン絵

⑤1892年 ニューヨーク：マクローリン社『3びきのくまのおはなし』のゴールドロックス

(*The Story of the Three Bears*. New York: McLoughlin Bro's.) (Little Kitten Series)

ゴールドロックスはきれいな女の子で、花輪を作りに森へ行った。熊の家の玄関では、ノッカーに届かなかったので枝を折って鳴らしたなど礼儀正しい。結末は、ゴールドロックスはもう二度と招かれていない他人の家に入って、くつろいだりしないと反省して終わる。(図9)



図9 1892年  
マクローリン社出版

なお、話のタイトルにゴールドロックが含まれるようになったのは 20 世紀になってからである。現在のところ、1904 年に出版されたと推定されている「ゴールドロック、または 3 びきのくま」(『子どものための古い昔話集』所収)が、出版年が推定される中では最も早い出版と推測する。(“Goldilocks; or the Three Bears” in *Old Fairy Tales for Children*. London: Ernest Nister, New York: E.P. Dutton.) 今日では「ゴールドロックと 3 びきのくま」のタイトルが大半である。

### (7)ジェイコブズ編『イギリス昔話集』

①1890 年『イギリス昔話集』所収「3 びきのくまの話」(“The Story of the Three Bears” in *English Fairy Tales*. London: D. Nutt.)

ジェイコブズは「3 びきのくま」の話を作者のわかっている物語が昔話化した例であると認識しており、サウジの文章をそのまま掲載した。

②1894 年『続イギリス昔話集』所収「スクレイプフット」(“Scrapefoot” in *More English Fairy Tales*. New York: G. P. Putnam's Sons.)

キツネのスクレイプフットが 3 びきの熊の宮殿にしのびこむが、見つかって窓から放り出される話である。①の挿絵を描いたジョン・D. バトン(John D. Batten)が昔聞いた話をジェイコブズに語ったことから収録された。ジェイコブズは、「3 びきのくま」は、もともとは雌狐だった話が、雌狐を異称とする「いじわるなおばあさん」として受け取られたのではないかと推測した。

### (8)いろいろな絵本 (戦前まで)

①1890～1900 年代 ラファエル・タック社『3 びきのくま』(少女の名はゴールドロック)



図10 タック社版  
絵本表紙

(*The Three Bears*. New York, London, Paris: Raphael Tuck & Sons, Ltd.)

何度も版を重ね、ロシアでも出版された絵本である。画家名は記載されていない。(図 10)

**内容:**「コーギー・コテージ」に住む熊の親子は、きちんと服装を整えて昼食が冷めるまで散歩に出かけた。ゴールドロックが家に入り込み、おかゆを食べ、椅子を壊し、汚い靴のままで坊ちゃんぐま(Sonny Bear)のベッドに寝た。逃げたゴールドロックに怒った熊たちはタック父さんに訴えた。タック父さんは、熊の家で寝ているのを見つけた者は罰せられるというはり紙を作った。

**絵:** Mr.ベアはフロックコートを着てシルクハットをかぶり、Mrs.ベアはボンネットをかぶり、坊ちゃんぐまはベレー帽をかぶっている。ゴールドロックは豊かな

巻毛をしていて、青いスカートをはいている。映画の瞬間を描いたような動きと表情に特徴がある。

②1904 年 レズリー・ブルック作「3 びきのくまのお話」『金のがちょうの本』ロンドン:フレデリック・ウォーン社 (少女の名はゴールデンロック) (Leslie Brooke. “The Story of the Three Bears” in *The Golden Goose Book*. London: Frederick Warne.) (図 11)

**内容:**オーソドックスなストーリーで、ゴールデンロックはあまり良い子ではない。熊たちは二度とゴールデンロックを見なかったと結んでいる。

**絵:**熊の家族は仲よく文化的で豊かな生活をしている。女の子は長いワンピースを着て大きな帽子をかぶっている。動きのある熊の様子を描いたモノクロ挿絵や、繊細な色使いで描かれているカラー挿絵は、デザイン性に優れ、ユーモ



図11 ブルック作  
「3 びきのくま」挿絵

ラスに物語の世界を提示している。



図 12 ストーン絵  
『3びきのくま』表紙

③1927年 C.R.ストーン絵『3びきのくま』アメリカ：ウィットマン出版リネンブック(少女の名はゴールドロックス) (*The Three Bears*, illus. by C.R. Stone. Racine, Wis.: Whitman Publishing Co.) (図 12)

20世紀にアメリカで大量に出版された「3びきのくま」絵本の典型例である。ゴールドロックスはかわいらしい女の子として描かれている。

内容: 暑い日にお母さんぐまがおかゆを作り、家族の熊たちは散歩に出かけた。木陰でお父さんぐまに本を読んでもらっているうちに、熊たちは昼寝をした。その間にゴールドロックスが道に迷って熊の家に来た。ゴールドロックスが逃げた後、子ぐまはもっと居てほしかつたと話した。小さな女の子だし、悪いことをするつもりはなかっただろうと熊たちは考えた。ゴールドロックスは家に帰って、二度と歩きまわったりしないと母に約束した。

絵: 全ページにはっきりした色使いのフルカラーの絵が入っている。熊たちはきちんと服を着ており、ゴールドロックスはピンクのワンピース姿で描かれている。

### (9)トルストイ編『新アズブカ』出版以前の「3びきのくま」

以上から考察すると、トルストイが「3びきのくま」(1875年出版)を再話したと推定する70年代の初め頃は<sup>4</sup>、英語圏における「3びきのくま」は現在の最終型に至る途中の段階にあった。既に熊は父ぐま、母ぐま、子ぐまの3大家族であることが定番となっており、後述するように、熊に名前がある場合もみられた。女の子の名前はほとんどが「シルバーロックス」で「ゴールデンヘア」も出現しているが、まだ「ゴールドロックス」は登場していない(1888年に初出)。女の子の性格は、最初に出版されたサウジーの汚いおばあさんのイメージが残っていたのか、いたずら好きであることが多く(ラウトレッジ社など)、模範的な少女ではないとされていた。その後19世紀末から20世紀になると、女の子が肯定的に描かれるようになった。

## 2) ロシアにおける「3びきのくま」の受容

以下、年代順にソビエト期までの「3びきのくま」の出版状況を概観する。

### (1)イギリスの絵本を翻訳・再話して出版 絵をそのまま複製

ロシアの「3びきのくま」は、イギリスの絵本の絵を利用して出版することから始まった。

①H. ウェア絵『3びきのくま』(ラウトレッジ社 1860~70年代)(p.38(6)③参照)を模倣した絵本 a.1871年『金の巻き毛ちゃん、あるいは3びきのくま』モスクワ:パゴージン印刷所(図 13)

(*Девочка - Золотые кудри, или Три медведя = Une fille nommée flacons-d'or ou Les trois ours*. Москва: тип. М.П. Погодина.)

表紙は独自のデザインであるが、絵も含めてラウトレッジ社の絵本を全訳した絵本である。フランス語とロシア語が2列に併記されている。

b.1894年『3びきのくま』モスクワ:パシコフ印刷所(図 14)

(*Три медведя*. [Москва]: типо-лит. П.И. Пашкова.)

ほぼラウトレッジ社の全訳である。表紙は中の絵を利用して作成している。熊の家族は名前ではなく「雄熊(медведь)」

「雌熊(медведица)」 「チーニュ(Тиню)」(底本ではTiny)としている。



図 13 パゴージン印刷所出版 表紙



図 14 パシコフ印刷所出版 表紙

②『3びきのくま』(ラファエル・タック社 1890~1900年代出版) (p.39(8)①参照) を模倣した絵本  
c.1898年『3びきのくま』モスクワ:ソロヴィヨフ出版(図15)

(*Три медведя*. Москва: М.Т. Соловьев.)

タック社の絵を利用して、以前熊に捕まっていた女の子が熊の  
家に来て、こぐまのミーシカの料理を食べ、椅子を壊して逃げ  
去ったという内容に改変して、ロシア昔話「マーシャとくま」  
の続きの話とした。内容に合わせて絵の順番も再構成している。



図15 ソロヴィヨフ  
出版 表紙



図16 スイチン出版  
表紙

d.1907年『3びきのくま』モスクワ:スイチン出版(図16)

(*Три медведя*. Москва: И.Д. Сытин.)

くまの家族に関する加筆が多い。

## (2)1875年 トルストイが教科書に掲載した「3びきのくま」

トルストイが再話して初等教科書『新アズブカ』(*Новая азбука*)に掲載した作品である。トルストイの「3びきのくま」については第3章で詳述する。

その後、トルストイ「3びきのくま」は1899年にボリフ出版のI.I.バジャノフ編『私の最初のお話集: 幼児のための本』(И.И. Бажанов. *Мои первые сказки: Книга для малых деток*. Санкт-Петербург; Москва: т-во М.О. Вольф)に所収され、子ども向けの読み物として紹介された。

また、1908年にはスイチン出版からN.V.トゥルポフ(Н.В. Тулупов)とP.M.シェスタコフ(П.М. Шестаков)編『3びきのくま』が出版された<sup>5</sup>。この本はトルストイ作「3びきのくま」の他に動物の昔話2話を所収した初級用の国語副読本で、革命前には6刷(1914)、革命後には出版元を「国立出版所」に変えて1920年まで出版されており、広く流通していた。

クネーベリ出版は1909年頃に『3びきのくま』を出版したが、内容はトルストイ作としながら内題に「3びきのくまと金色の髪の子」<sup>6</sup>と女の子の名前を加え、文章も少し変更したものであった。薄い冊子で、モノクロの挿絵はイギリスのニスター版<sup>7</sup>の模写2図と新たに描いた2図が混載されて統一感が薄く、巻末にはウサギの話を併載していた。また、同社の1910年出版『小さな子どもたちのためのロシアの昔話集』<sup>8</sup>にも、ほぼ完全な形のトルストイ作「3びきのくま」が所収された。この本にはウシンスキーやトルストイ、トゥルポフ等の著作から集めたロシア昔話が掲載されたが、この時点で「3びきのくま」が既にロシア昔話とみなされるようになっていたことが確認される。

## (3)1881年 有益図書普及協会出版『3びきのくま』

(*Три медведя: (Сказка с нем.)*. Москва: Общество распространения полезных книг.)

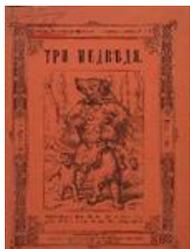


図17 有益図  
書普及協会出版  
表紙

モノクロ挿絵の薄い小型本で、表紙と扉に文部省学術委員会の認可と、学校図書館蔵書の許可を得ていることが記されている。「ドイツ語からの話」と付記されているがドイツ語版は不明である。6刷が1900年に出版されており、1913年には出版社を変えて印刷されていることから、広く普及していたと推測する。(図17)

簡潔な文章で、女の子は金髪ちゃん(Белокурка)(白にちなむ金髪の呼び方)と名づけられ、くまの家族にも名前がある。挿絵と内容から、底本は1870年頃にラウトレッジ社から出版されたモノクロ版の絵本<sup>9</sup>であると推定する。ただし、結末に悪い子が反省したという底本にはない教訓が加筆されている。

内容: いたずらで聞き分けのない女の子の金髪ちゃんが主人公で、くまたちの名前はタプティギン氏(Господин Таптыгин)、マラーニヤ夫人(Господя Маланья)、ミシューク(Мишук)である。金髪ちゃ

んは、椅子が壊れて怒鳴り散らす。2階の寝室で小さなベッドに寝ているところを見つけた金髪ちゃんは、窓から逃げだして家まで駆けた。親に怒られた金髪ちゃんは、それ以後大人の許可なく家から離れたりしない、おとなしくて、よく言うことを聞く女の子になった。

**(4) 1914年 ヴァレリー・カーリク作 絵本『3びきのくま』ボリフ出版**  
(Валерий В. Каррик. *Три медведя*. Санкт-Петербург: тип. Б. М. Вольфа.) (Сказки-картинки / Валерий Каррик ; № 29)

ロシアで「昔話絵本」シリーズを何冊も出版していた V.カーリク (1869-1943)作の「3びきのくま」である。(図 18) 初版はボリフ出版から出版されたが、2刷以後はザドゥルーガ社から出版された(1918年3刷出版)。さらに、1920年にはパリで新たに絵を描き直してロシア語で出版された。

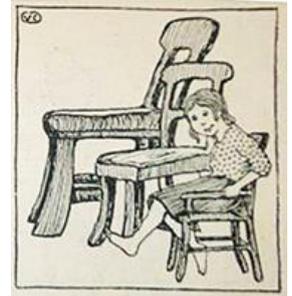


図 18 カーリクの挿絵

**内容:** カーリク独自の簡略化した再話である。登場者は、女の子、大きな雄熊、中ぐらいの雌熊、小さな子熊(男性)となっており、名前はつけられていない。文字の大きさを熊の大きさに合わせている。

**絵:** モノクロの絵が各ページに入っている。熊は服を着ていないが、二本足で立って表情豊かである。女の子は裸足で農民の娘のような服装をしており、表情や仕草から無邪気で朗らかな性格が感じられる。

**(5) ソビエト時代の「3びきのくま」**

「3びきのくま」の出版調査をしたところ、それまで種々あった「3びきのくま」の物語は、革命が一段落したあと 1920年代半ばからトルストイ再話にほぼ統一された。トルストイの原文が尊重されており、旧字体を新字体に直して句読点や前置詞を変える程度のわずかな変更を加えて出版された。原文尊重については、ソビエト連邦崩壊後の出版も同様である。

ソビエト時代には多くの画家が絵本を手がけたが、ユーリー・ワスネツォフが最も早期から、多数のバージョンで絵本を作成した。また、第二次世界大戦後には V.レーベジェフがリアリズムの手法で描いた『3びきのくま』が出版された。

① ユーリー・ワスネツォフ絵『3びきのくま』

1935年に最初のユーリー・ワスネツォフ絵の絵本が国立の「児童文学出版」から出版された。ロシア風の木造の家に住む熊の家族が擬人化されて描かれており、ロシア民芸品に似た素朴であたたかい雰囲気のある絵がロシアらしさを強調している。1937年にはロシア連邦内の諸民族の言葉やドイツ語などに翻訳され、多くの国に送られた<sup>10</sup>。(図 19)



図 19 ワスネツォフ絵、1961年版

② ウラジーミル・レーベジェフ絵『3びきのくま』

レーベジェフ絵『3びきのくま』(ジェットギズ出版)は1947年に出版された横長の大型絵本で、フルカラー版の他にモノクロ版も作成された。レーベジェフは熊の生態を観察してリアリズムの手法で描いており、熊たちは服を着ていない。立ち上がって怒る熊の姿には、野生の熊の狂暴さもうかがえる。この絵本も1950年代に日本語やドイツ語などの各国語版がモスクワの外国語図書出版所で制作されて、各国に送られた<sup>11</sup>。(図 20)



図 20 レーベジェフ絵、1947

**3. トルストイ「3びきのくま」の底本推定**

トルストイ再話「3びきのくま」(“Три медведя”)は、1875年出版の『新アズブカ』(*Новая азбука*)に所収された。挿絵は入っていない。それ以前に出版されていた種々の「3びきのくま」と比較検証した結果、1860年代後半から出版されたラウトレッジ社の大型のトイブックス『3びきのくま』(*The Three Bears*. London: George Routledge & Sons.)を参照にしたと推定した(p.38(6)③参照)。

## 1) 底本と推定した作品

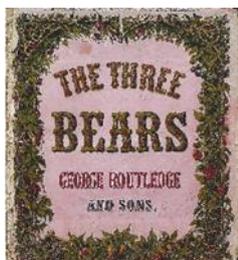


図21 ラウトレッジ社『3びきのくま』表紙 [1868]

この絵本は、ハリソン・ウィアが描いた挿絵6頁と作者名のない文章6頁とで構成されている。絵と文章は頁毎に同じ印刷であるが、その配置を変える例が見られる。1860年代はピンクの表紙、その後は黄色の表紙を付けて何度も出版された。(図21)また同社出版の絵本を合冊した作品集にも収録された<sup>12</sup>。

なお、ニューヨークのマクローリン社出版の『3びきのくま』(おとぎの月光シリーズ) (*The Three Bears*. New York: McLoughlin Brothers Publishers, [1866].) (Fairy Moonbeam Series)の小型絵本も同文であるが、生意気な少女と表情豊かな熊の家族の絵が頁の上半分を占めており、コミカルな印象である。

ラウトレッジ社の絵本は文字の配置がトルストイと近い上に、ウィア絵の熊が野生の熊の猛々しさを伝えていてトルストイの再話と通じるため、ラウトレッジ社が底本であろうと判断した<sup>13</sup>。

## 2) 推定の根拠

トルストイ「3びきのくま」(以下“Три медведя”とする)とラウトレッジ社『3びきのくま』(以下 *The Three Bears* とする)は以下4点の一致があり、この作品を底本と推定した。

### (1)物語の展開

- ①どちらも女の子の描写から話が始まる。女の子が家を見つけて入った段階で、読者に3びきの熊の家であることを説明して熊たちが紹介される。
- ②スープ、椅子、ベッドを見て怒った熊たちが発する言葉が、父熊、母熊、子熊と同文で3回きちんと繰り返され、最後の子熊の言葉に一文つけ加えている。「スープをいじった」、「椅子に座って動かした」、「ベッドに寝てしわくちゃにした」という言葉使いも一致している。

### (2)熊に名前がある

“Три медведя”のくまの家族が固有の名前を持っていることが、トルストイ再話の特徴の一つである。ロシアでは熊は伝統的にミハイルやその愛称のミーシャと綽名されていたため、父熊をミハイル・イワヌイチ、母熊はナスターシャ・ペトロヴナ、子熊はミーシャのさらにかわいらしい呼び方であるミシュートカと名づけられている。ロシアでは名前と父称で呼ぶのは丁寧な呼び方で、熊を敬意をはらうべき存在として認める意識がうかがえる。

英語圏で出版された「3びきのくま」は、第2章1) (5) (p.37-38)で検証したように、初期には大きい熊、中くらいの熊、小さい熊と記され、その後はパパ熊、ママ熊、子熊とも呼ばれた。ラウトレッジ社とマクローリン社の *The Three Bears* は熊の家族に名前を付け、父熊をラフ・ブリュイン (Rough Bruin)、母熊をマミー・マフ (Mammy Muff)、子熊をタイニー (Tiny) と呼んでいる。ブリュインは熊の異名で、父熊は分厚く毛むくじゃら、母熊はマフのように柔らかな毛皮というふうに描写されている。トルストイの熊の説明も、父熊は大きくて毛むくじゃらとしている。

(3) くまの言葉の活字

“Три медведя” (図 22) は *The Three Bears* (図 23) 同様に熊たちの身体の大きさに合わせて極端に活字を変えており、また、字配りや行の配置も類似している。

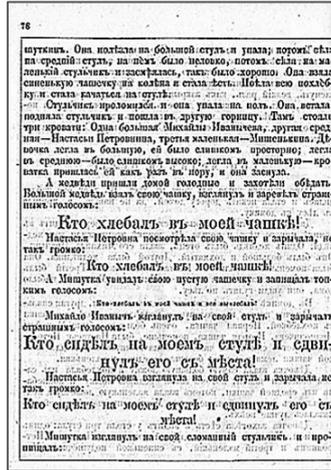


図 22 トルストイ p.78

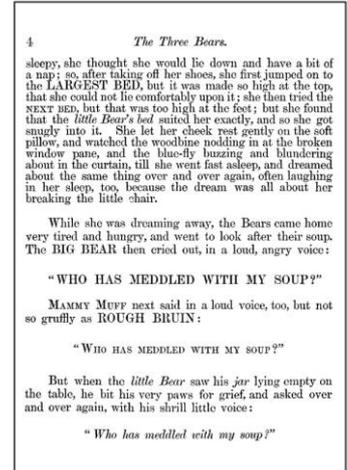


図 23 ラウトレッジ社 p.4

(4) 細部の一致

“Три медведя”には *The Three Bears* に出てくる固有の単語などの細部の共通性が見られる。

- ① 女の子の食べたもの：お粥 (porridge) の例が最も多く、ミルク (milk) としたものもある中で、マクローリン社とラウトレッジ社出版の絵本だけがスープ (soup、rich rabbit-soup) としている。トルストイもスープとしたが、ピョートル大帝時代にヨーロッパから入ってきた単語であるスープ (sup) ではなく、より古いポタージュ (похлебка) の単語を用いた。
- ② 子熊の食器：“Три медведя”は小さな青い茶碗 (синенькая чашечка) としているが、*The Three Bears* では小さな青い鉢 (a little blue jar) と記されている。同じ文章のマクローリン社の絵本以外、子熊の食器を青とする例はなかった。
- ③ 子ぐまがベッドに登る時に使ったスツール：“Три медведя”で小さなベンチ (скамеечка) の単語を使っている箇所は、*The Three Bears* では “a stool” となっている。子熊がベッドに登るのにスツールを使うのは、ラウトレッジ社とマクローリン社の文章のみに見られた。

3) 考察

以上的一致点から、トルストイは H.ウィア絵のラウトレッジ社の絵本を参考にしたと推定する。しかし、前半部分はいたずらな女の子の性格や行動などが描写されているラウトレッジ社の絵本とかなり異なっている。トルストイの独自性が発揮されたとも考え得るが、トルストイは教科書出版のために多くの児童向けの話を集めていたため、英語圏で数多く出版されていたさまざまな「3びきのくま」を参照した結果の再話であるとも推測される。

4. トルストイ「3びきのくま」の特徴

トルストイ全集に所収されている『新アズブカ』の「3びきのくま」の注に、「前半はトルストイの再話、後半はフランスの原書 «Une fille nommée boucles d'orées, ou Les trois ours» («Девочка золотые кудри, или Три медведя») 『金の巻き毛という名の女の子、あるいは3びきのくま』に似ている」と記載されている<sup>14</sup>。このフランス語タイトルの本を長年捜したが不明であった。しかし、ロシアで出版されたフランス語とロシア語が併記された『金の巻き毛ちゃん、あるいは3びきのくま』(モスクワ：パゴージン印刷所 1871) (p.40 (1)①a.) とタイトルのフランス語が似ており、ロシア語が一致していることが判明した。この本はトルストイの「3びきのくま」よりも4年前に出版された。フランス語に不自然なところが感じられるため、あるいはロシ

アで独自に英語からフランス語とロシア語に翻訳したのではないかと推測する。トルストイもラウトレッジ社の本を参照したと推定したため、比較したことでトルストイの特徴が明確となった。

### 1) 『金の巻き毛ちゃん、あるいは3びきのくま』の特徴

『金の巻き毛ちゃん』は、ラウトレッジ社 *The Three Bears* をほぼ逐語的に訳しており、いたずら好きな女の子が登場し、最後は反省して終わる。登場者たちの命名は、シルバーロックス（銀の巻き毛ちゃん）は「金の巻き毛ちゃん」（Золотые Кудри）に<sup>15</sup>、父熊は「足曲がり=くまの異名」（Кослапый）、母熊は「マフ」（Муфта）、子熊は「パタパタ歩き=子ぐまの異名」（Топтышка）とした。また、熊の言葉の文字の大きさは底本とは異なり、どれも同じ活字を用いている。

### 2) 比較から判明したトルストイ「3びきのくま」の特徴

*The Three Bears* および『金の巻き毛ちゃん』との比較から以下の特徴が浮かびあがった。

#### (1) 物語の簡潔化

ラウトレッジ社 *The Three Bears* は、前半にストーリーに関係の無いエピソード（シルバーロックスは花のネックレスを作ろうと森に入る、いたずらを教えてくれた老庭師のマイクに話してクリスマスまで笑い合おうと思う、くまのスープの中身など）が多いが、トルストイは全て省略した。

#### (2) 「シルバーロックス (Silverlocks)」を名前のない「女の子 (девочка)」とした

シルバーロックスがいたずら好きで大胆な女の子（壊れた椅子の回りを踊って回るなど）であるのに対して、トルストイは名前も背景もない一般名詞の「女の子」とした。「女の子」は熊の家で子どもらしく欲望のままに行動するが、個性は感じられない。

#### (3) 熊につけた名前

パゴージン印刷所『金の巻き毛ちゃん』は熊の名前を蔑称を用いて訳したのに対して、トルストイは名前と父称付きの名を付けて、熊を敬うべき動物として扱った。トルストイの自然観や野生への畏敬の念がうかがえる命名である。

トルストイ作の教科書『アズブカ』（1872）と新版の『ロシア語読本』（1875）には、熊の登場する物語が他に2話掲載されている。「馬車に乗った熊」（“Медведь на повозке”）は、熊いじめの見世物として連れ歩かれていた熊が、荷馬車に乗って疾走する羽目になった話である<sup>16</sup>。「好きなればこそ（狩人の話）」（“Охота пуще неволи (Рассказ охотника)”）は、トルストイの若い頃の熊狩の体験を基にした短編である<sup>17</sup>。友人と熊狩に行ったトルストイは、勢子たちに追い出された手負いの熊に組み敷かれて、額を咬まれる大けがをした。これらの実話から、ロシアでは熊は地続きの空間に生きている野生動物であり、トルストイにとって特別な存在であったことが理解される。

#### (4) 簡潔な文体で3回くり返しを重視

トルストイの文章は、短くて簡潔である。例として冒頭の文章を比較すると、*The Three Bears* は、「むかしむかし、遠い田舎に厚かましくてでしゃばりな女の子がいて、村の人々は女の子のカーリングした髪がとても明るくて輝いていたので、女の子のことをシルバーロックスと呼んでいました。」（“A very long while ago, there was a bold, forward little girl, who lived in a far-off country, and the village people called her Silverlocks, because her curly hair was so light and shiny.”）となっているが、トルストイは「一人の女の子が家から出かけて森に行きました。」（“Одна дувочка ушла

из дома в лес.”)と非常に簡潔である。

家に帰った熊たちが侵入者の狼藉を見つけた際は、スープ、椅子、ベッドのそばの3回、熊たちが同じ言葉をきちんと3回繰り返すのは、どちらも一致している。*The Three Bears*は大文字の2種類の大きさの活字とイタリック体を用いたが、トルストイは活字のポイントの極端な違いで表現した。トルストイがこの作品の活字にこだわったことは、出版社に指示した手紙で明らかである<sup>18</sup>。

### (5)教訓なし

*The Three Bears*の結末は、家に帰ったシルバーロックスは叱られて、自分の物ではないものをいじらないように気をつけるようになったと教訓で終わる。いたずら好きのシルバーロックスの不作法な行いを諷める結末である。一方、トルストイは、逃げた女の子に熊たちは追いつかなかったと記すのみで、教訓なしで物語が終わる。

### 3) トルストイの再話による物語の変容

トルストイは文章にこだわりを持つ作家であった。また、この話が初級むけの教科書に掲載されたことを考えると、昔話の再話としてだけではなく、文章を練ったトルストイの作品として考察すべきであると考えられる。熊たちの言動は文字の大きさを変えてそれぞれの特徴を表現し、3回くり返しを守りながらもミシュートカが最後に情報をつけ加えて破調として緊張を高めていく。また、単純化された文章ではあるが、ミシュートカやミハイル・イワヌイチの呼び方を場面によって違えており<sup>19</sup>、機械的な文章とは異なる文学性が感じられる。物語を単純化した再話でありながら、底本にあるミシュートカの茶碗が青いことや、ミシュートカがスツールを使ってベッドに登る描写を踏襲し、子熊の椅子に青いクッションを加筆したことで、物語に色彩とリアルな存在感が増している。

トルストイがシルバーロックスという名前を持ついたずら好きの女の子を、一般名詞の「女の子」にして個性を消したことにより、女の子は現実感が希薄な抽象的な存在へと変化した。子どもは初めて物事に出会った際には、触ったり、味を見たり、体験してみることで知識や経験を得て発達していく。「女の子」とすることで、好奇心や探究心旺盛である普遍的な子ども像が提示されることになり、また教訓がないことから、女の子が熊の怒りから逃れることができよかったと、安堵感を得て終わる物語となった。底本にある行儀の悪い子を諷める意図は消失し、好奇心を持つ子どもの特性を肯定する内容に変容したと言える。

一方、女の子の戻っていく家や背景が描かれなことから、*The Three Bears*の内包する、家から出発し、危険な冒険をして、また家に帰ってくるという「行きて帰りし物語」の構図は失われた。主人公の行動で話が進展するのが昔話の特性であるが、女の子がどこから来てどこに帰ったのか判らないため、危機を脱して一応の安堵感を得ても、物語の完結感は弱まる結果となった。反面、女の子の行く末を読者の想像に委ねることで、物語に余韻が生まれたとも言える。昔話を超えた文学性が感じられることも、トルストイの作品として長く愛されている所以であると推測する。

また、父称付きの名前を与えてトルストイが敬意を表した熊の家族について考察すると、トルストイの熊たちは直情的で、生活圏を冒す存在に厳しく対応している。*The Three Bears*の熊は、家を出る前にタイニィの顔を擦ったり、毛皮にブラシをかけたりして「健康のために」散歩に出かけるが、トルストイは簡潔に散歩に出たと記し、ユーモラスな熊の行動は描写しない。自分のベッドにいる女の子にタイニィは怖い顔を作ってみせるが、ミシュートカは「捕まえて!」と言って噛みつこうとする。擬人化された昔話においても、トルストイの熊たちは野生の習性を保持してい

るところに、現実の自然を尊重するリアリストであったトルストイの文学観・自然観がうかがえる。

ロシアの昔話や寓話には、擬人化された動物が特有の性格を有している話が多い。「マーシャとくま」など熊の登場する昔話では、熊は力が強く図体は大きいが無能者の役割を担わされている。それに対してトルストイの「3びきのくま」は野生に近く、尊厳を持って描かれている点で他のロシアの昔話や寓話とは異なっている。

「3びきのくま」は、トルストイがタイトルに「Сказка」（お話、昔話）とのみ記したことと、熊の名前がロシア風であることにより、ロシアの話として受け取られるようになった。ロシア昔話には熊の出てくる話が多く、違和感なく子どもに受け入れられたと推測する。

## 5. おわりに

トルストイの「3びきのくま」は、もともとイギリスの昔話をトルストイが再話したものであった。教訓がないために時代の変化に左右されることがなく、会話などが練り上げられた文体であることも寄与して、150年近くたった今日でもロシアでは「3びきのくま」の絵本や読み物は、トルストイ作と明記してほぼ原典のままの文章が用いられている。ソビエト連邦崩壊後、英語圏の「3びきのくま」が翻訳絵本として出版されるようになったが、その数は少数である。

ロシア革命後に亡命してフランスやアメリカで多数の絵本を制作したフィodor・ロジャンコフスキー（Федор Рожанковский 1891-1970）は、コールドコット賞を受賞した絵本画家である。ロジャンコフスキー絵の『3びきのくま』（*The Three Bears*）（初版1948年）は、お行儀の悪いゴールドベアロックスが主人公の昔話絵本で、アメリカのリトルゴールデンブックス（Little Golden Books）シリーズの1冊として長く愛されている。2013年に高名な亡命絵本画家の絵本としてロジャンコフスキーの *The Three Bears* がロシアで紹介されたが<sup>20</sup>、その際、絵の順番やストーリー展開をトルストイの「3びきのくま」に似た内容に編集しなおされた。（図24）トルストイの「3びきのくま」がロシアでいかに愛されているかを物語る例である。

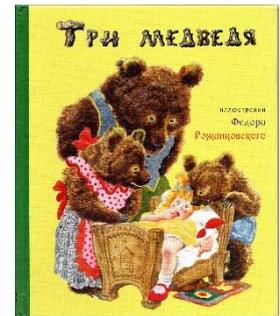


図24 ロジャンコフスキー絵『3びきのくま』表紙 2013

日本でも「3びきのくま」は明治期から受容の歴史がある。日本での受容についても今後研究を続けたい。

本稿は、第59回日本児童文学学会研究大会（2020年11月15日 オンライン開催）での研究発表「トルストイ再話「3びきのくま」研究：英語圏での出版の歴史を背景に」を基に加筆修正を加えた。

### <注>

- 1 オーバーは、1868年にアメリカ領事スカイラー氏(Mr. Skyler)がトルストイに英文教科書「第1、第2、第3リーダー」(“The First, Second and Third Readers”)を進呈したという情報について、教科書の正体は不明とし、ルイス・B.モンロー(Lewis B. Monroe)の『第2リーダー』(1873)に所収の「3びきのくま」は家族ではないため、底本とはみなせないとしている。『3びきのくまのお話：国際的な古典の展開』(*The Stories of the Three Bears: The Evolution of an International Classic*) 220頁。
- 2 絵本のうち、最も早い出版は『メイヴァおばさんのよい子のためのおとぎ話』(ロンドン・ニューヨーク：ラウトレッジ社、1858)所収の「3びきのくま」であった。(Aunt Mavor. “The Three Bears” in *Aunt Mavor’s Nursery Tales for Good Little People*, illustrated by Alfred Crowquill. London, New York: G. Routledge.)

- 3 1967年にトロント公共図書館から、解説付きの復刻版が出版された。
- 4 執筆年代を推測する材料となる「3びきのくま」の手稿は残っていない。『新アズブカ』と同時期に執筆された『アンナ・カレーニナ』（出版1875-77年）の第1章IXに「3びきのくま」のエピソードが登場する。登場人物のレーヴィンが求婚相手である三人姉妹の末娘を、10年ぐらい前にイギリスの童話にでてくる三匹の子熊にたとえて「タイニイ・ベア(Tiny bear)」と呼んでいたと語られる。トルストイは実際の出来事を小説に反映させる習性があり、身近にこのエピソードが存在したと推測する。『アンナ・カレーニナ』は同時代が舞台であるため、1860年代後半にはトルストイの周辺に「3びきのくま」のエピソードがあったと考える。(1862年に結婚したトルストイの妻は3姉妹の真ん中)
- 5 N.V.トゥルポフとP.M.シュスタコフ[編]「新しい学校双書：第一学年学習用の本」シリーズNo.4 スイチン出版 [1908] ([Ред.] Н.В. Тулупов и П.М. Шестаков. *Три медведя*. Библиотека новой школы: Книжка для чтения на первом году обучения; № 4, Москва: Изд. Т-ва И. Д. Сытина.)
- 6 Л. Толстой. “Три медведя и Золотая Головка”. *Три медведя*. Москва: И. Кнебель, [1909].
- 7 『ゴールドロックス、または3びきのくま』ロンドン：アーネスト・ニスター [1904] (*Goldilocks; or the Three Bears*. London: Ernest Nister, [1904].)
- 8 M.Kh. スベンチツカヤ編『小さな子どもたちのためのロシアの昔話集』クネーベリ出版 [1910] (Под ред. М. Х. Свентицкой. *Русские народные сказки для маленьких детей: В излож. Д. Ушинского, Л. Толстого, Н. Тулупова, О. Роговой и др.* Москва: И. Кнебель, [1910].)
- 9 『3びきのくま』ダルジル挿絵 ロンドン・ニューヨーク：ラウトレッジ社 [1870] (*The Three Bears*, illustrated by Dalziel. London, New York: George Routledge & Sons, [1870].)
- 10 1961年出版の絵本(図19)が福音館書店『3びきのくま』(レフ・トルストイ文 バスネツォフ絵 おがさわらとよき訳 1962)の原典となった。
- 11 日本でもモスクワの外国語図書出版所出版の『三びきのくま』(レフ・トルストイ作 岡田よし子訳 ソヴェトじどう・せいねんぶんがくそうしょ [1957])がナウカから販売された。また、偕成社『3びきのくま』(トルストイ作 ウラジミール=レーベデフ絵 内田莉莎子訳 1989)の原典となった。
- 12 「3びきのくま」が所収されている『あかずきん：絵本』(*Little Red Riding-Hood: Picture Book*) (ラウトレッジ社出版 出版年不明)の併録作品に、ウィアのサインと「1865」と記されている。1850年出版(カンドール再話)と異なる絵を付けた『3びきのくま』は、1860年代に制作されたと推測する。
- 13 1899年出版のポリフ社『私の最初のお話集：幼児のための本』所収のトルストイ「3びきのくま」の挿絵はH.ウィアの絵が利用されており、トルストイ再話との関連性を暗に示していると考えられる。
- 14 Лев Николаевич Толстой. *Полное собрание сочинений Том 21*. Москва: «Терра», 1992, с.622.
- 15 底本では「銀の巻き毛ちゃん(Silverlocks)」となっている。英語圏では当時はまだ金の巻き毛ゴールドロックスの名前は登場していないため(Golden Hairは1860年代末頃に登場)、「金の巻き毛ちゃん」としたのはロシアでの先取りと推定する。
- 16 最初の教科書『アズブカ』(1872)では第2巻に、新版(1875)では『ロシア語読本』第2巻に所収。
- 17 『アズブカ』第4巻に、新版では『ロシア語読本』第3巻に所収。
- 18 1875年3月8日付のN.M.ナゴルノフ宛のトルストイの手紙に、最大の活字はもっと黒くとか、最少の活字は8ポイントでなどの指示が記されている。Лев Николаевич Толстой. *Полное собрание сочинений Том 62*. Москва: Гос. изд. худ. лит., 1953, с.157.
- 19 父熊の名前ミハイール・イワヌイチ(Михаил Иванович)は途中からミハイロ(Михайло)に変わり、ミシュートカはミーシェンカと呼ばれる場合もある。文のリズムとイントネーションの違いが関係しているものと推測する。現在はトルストイ原話作としながらも、最初からミハイロに書き直して出版しているものも散見される。
- 20 『3びきのくま』フォードル・ロジャンコフスキー絵 モスクワ：カリエラ・プレス 2013 (*Три медведя*, Илл. Фёдора Рожанковского. Москва: Карьера Пресс, 2013.)